

オッカムにおける フィクトゥム理論について

大 鹿 一 正

I

オッカムは『命題集註解』第一巻第二区分第四問題から第八問題に亘って、「普遍」とは何かについて論じている。⁽¹⁾ 第四-七問題はスコトゥスを中心にした歴史的研究といていいが、普遍は実在する事物であるとか、事物の中の本質であるとか、いわゆるスコトゥスの共通本性を含めて世に行われている普遍の諸理論を吟味したり反論したりした上で、そこで彼は普遍は概念 *conceptus* であるという説を確立し、然る後、第八問題でその普遍概念の本性は何かを吟味するのである。我々はそこに普遍概念の有力候補として、知性認識活動そのもの、すなわち *intellectio* だとか、スペチエスであるとか、知性認識活動から結果的に生じ魂の中に実在的に存する事物の似姿であるとか、ことばに対応するとき或る人為的制定記号であるとか、魂の中に観念的に存在し実在的存在は持たない観念像、すなわちフィクトゥム *fictum* であるとかが挙げられ、これら各種各様の理論が検討されるのを見るのである。オッカムのインテレクトオ理論であるとか、フィクトゥム理論であるとかいわれるのはこれが起源、⁽²⁾ 或いは、起源の一つである。

ところで、オッカムは、かように第八問題において普遍に関する諸理論を総合的に吟味しながら、結局、最後の結論を出すにいたっていない。第八問題の終りのところで彼は、これら諸理論のうちのどれがより多く真であるかは他の人々の判断に俟つとし、ただ、いかなる普遍も、ことばや文字のごとく任意の人為的制定に基づく普遍は別として、どんな仕方においてであれ魂の外に存

在するものではなく、自己の自然本性によって普遍たるものはすべて、実在的な仕方であれ観念的な仕方であれ、精神の中に存するものであること、及び、如何なる普遍もおよそ実体の本質とか本質の構成部分とかいったものではないことのみは確言できるとしている。⁽³⁾かくして、「普遍は魂の概念である。而してその魂の概念とは何か、如何なる本性のものか」という問題が生ずる。そして、「魂の概念」は、単に普遍を意味するにとどまらずオッカムの哲学体系の中でより広い意味を獲得する。

すなわち、オッカムは『命題論註解』の冒頭において「概念の本性についての諸見解」を論ずる序章を設けている。⁽⁴⁾もともとアリストテレスの『命題論』の冒頭には有名な、

「ところで、音声の中にあるものは魂の中にあるパトスの象徴であり、書かれたものは音声の中にあるものの象徴である」⁽⁵⁾

という一節があり、オッカムは『命題論』の註解の第一の問題点としてこの「魂のパトス」の解明を意図したのである。そしてオッカムは、命題の考察において「魂のパトス」といえば、音声でも文字でもなく、精神命題において或るものについて語られる或るものに他ならず、それは或る人々によっては「魂の観念」*intentio animae* と呼ばれ、また或る人々によっては「魂の概念」*conceptus animae* とも呼ばれる、と説明し、さてかかるパトス、或いは観念、或いは概念とはそもそも何であるのか、と問うのである。⁽⁶⁾然しオッカムはこの『命題論註解』序章においても「概念の本性」を最後まで究明することではなく、それが魂の外にある事物であるのか、魂の中に実在的に存在する何かであるのか、或いは、実在的に魂の中に存在するのでないただ観念的にのみ魂の中に存在する観念像であるのか、これらのことを考察するのは論理学者の仕事ではなく形而上学者の仕事にはかならないとして問題の直接的解明は一旦手から離し、然し、この難問をめぐる定立されうる若干の見解を提示してみたいとあって、上述のごとき諸理論を列挙するのである。その内容については更に後に考察するところであるが、ここで注意すべきことは、ここにおける諸理論の展開の過

程で、魂のパトスは、魂の観念、魂の概念という言い換えの他に、魂の中における「外界の事物の似姿」*similitudo rei extra* と呼ばれ⁽⁷⁾、更に、魂のパトス、観念、概念とは、一般に精神の中の命題、或いは三段論法、或いはそれらの部分の謂であるといわれる⁽⁸⁾。すなわち、ここにおいて魂の概念は単に普遍名辞に対応する「語としての概念」或いは「懐抱された語」*terminus conceptus* のみではなく、命題や推論を含んだ知識一般、思惟一般、或いは思想全体をも意味するものとなったのである。概念の本性の探究は論理学者の仕事ではなく形而上学者の仕事であるといわれるのも首肯されよう。フィクトゥム理論、インテレクチオ理論もかかるものとして考えられなくてはならない。

概念の何たるかについては、オッカムの論理学の名著なる *Summa Logicae*⁽⁹⁾ 『大論理学』にも説かれている。すなわち、『大論理学』第一部第十二章は、「第一観念」*intentio prima* と「第二観念」*intentio secunda* についての章であるが、そこでオッカムは先づ魂の観念とは何かを規定し、然る後にそれが如何にして第一観念と第二観念とに区別されるかを論ずるのである。そして始めに最も原則的な説明として、「魂の観念とは、魂の中にある何か他のものを表示する本性をもった或るもの」がそう呼ばれるのだという⁽¹⁰⁾。ところでその魂の中に存在するものとは「事物の記号」*signum rei* であって、そのものから精神の命題が複合されるところのものであること、音声の命題が音声・ことばから複合されていると同様であるといわれる。そして、「このものが、時には、魂の観念と呼ばれ、時には、魂の概念・懐抱 *conceptus animae* と呼ばれ、時には、魂の受動様態 *passio animae* と呼ばれ、時には、事物の似姿 *similitudo rei* と呼ばれるのである。また、ポエティウスは『命題論』の註解において、‘*intellectus*’ と呼んでいる。彼のいわんとするところは、精神の命題が ‘*intellectus*’ から複合されるというのだから、それは、魂の実在的な部分である能力としての ‘*intellectus*’ (知性) ではなく、魂の中に在って他のものを表示する或る種の記号で、それから精神の命題が複合されるところの ‘*intellectus*’ (知性認識内容) のことである。かくして、ひとが音声の命題を

表出する時には何時でも、より前に内に一つの精神の命題を形成するのであって、その精神の命題とは、日常通用することばになっていないもので、多くの人が屢々内に命題を形成しながら、日常通用することばにならない為に、どう表明したものかを知らないといった体のものである。このような精神の命題の構成部分が、概念、観念、似姿、知性認識などと呼ばれているのである⁽¹¹⁾ということになるのである。すなわち、概念はここにおいて、精神語 *terminus conceptus* として、そして精神語から構成される精神の命題、推論として論理学の領野において全く中心的な位置を確保するのであるが、その役割は自然本性的な記号として、ことばや文字語が人為的制定による記号たると同様に、他のものを表示 *significare* し、命題の中にあっては所定のもを代示 *supponere pro* するにつきるのである。そしてその限りにおいては、概念の本性が何であるかは、むしろ、第二義の意味しか持たないとさえいいうるかも知れない。G. レフがこの問題に関して、オッカムにおいて精神の中における概念の存在方式如何の問題は、彼がどの理論に傾いているかが彼の著作の年代順の主要な目印しとして取られるに至り、その内在的重要性に比して不当に重視されているとコメントしているのは一見識というべきであろう⁽¹²⁾。事実、オッカムもこの章においては先程の続きとして、では一体、魂のうちにあつてこのような記号たるものは何であるか、と一応観念の本性を問題にするけれども、簡単に、フィクトゥムと魂の性質とインテレクトオの三つの見解を挙げ、これらについては後に詳説されるだろうとして直ぐ切り上げ、「いまのところとしては、観念とは魂の中の或るもので、何かを表示し、それを代示することができる、或いは、精神の命題の部分構成することができるもの、ということで充分である⁽¹³⁾」としているのである。

以上において、「概念の本性」についての問題、フィクトゥムであるのかインテレクトオであるか、或いはまたそれ以外の魂の性質であるか、スペチエスカ等々といった問題がオッカムの思想体系の中でどのような位置を占めるものかということについての了解は得られたものと思う。然し、以上の三著の他にあ

と二つの著作がこの問題と深い関わりを持っている。一つは *Quodlibeta Septem* と呼ばれている七巻本自由討論集の第四卷第三十五問題で、上述の『大論理学』第一部第十二章と同じく第一観念と第二観念を取扱っている。いま一つは、*Quaestiones in Libros Physicorum Aristotelis* (アリストテレス自然学問題集) の第一問題から第七問題までで、これは上述『命題論註解』序章に類した形で概念の何たるかについての論述が集められている。この二著を特に取り上げる理由は、これが Ph. ベーナーや G. レフのいうオッカムの後期の著作であって、⁽¹⁴⁾前三著に見られなかったはっきりした態度でオッカムは、概念は魂の知性認識活動そのものであるというインテレクトオ理論を主張しているのである。上にも触れたごとく、前三著は共に、どの理論を採るかの態度決定はしていないが、初めの二著においてはフィクトゥム理論に傾き、『大論理学』はインテレクトオ理論に傾いているのが看取され、このフィクトゥムからインテレクトオへの転移の順序とその程度がそのまま著作年代の順序になるというのが一般の理解である。

ここにおいて次の問題、概念の本性はフィクトゥムであるという理論に賛意を表していた立場から、知性認識活動そのものであるというインテレクトオ理論の採用へ立場を変更せしめた原因は何か、更には、この変更によってオッカムの思想体系は如何なる意味においてより整合的により論理的に優れたものへと成長したのかといったような問題が生ずる。⁽¹⁵⁾変化の原因といっても内部的な原因もあれば外部からの影響といったものもあるだろうし、一人の思想家の思想の変化発展を論ずることは興味ある問題には違いないがその困難さも古今東西を通じて周知のところである。以下においてはその変化の経緯に若干の考察の眼指しを向けてみたいと思うのみである。

ところで、オッカムが後にインテレクトオ理論を採用して他の諸理論を否定する時の論拠は、知性認識活動以外のものによって救われる事態はすべてそれなしに知性認識活動によって救われる。然るに、知性認識活動そのものはあらゆる場合に必要である。ゆえに、それ以外のものは余分のものである、という

ことである。⁽¹⁶⁾そしてこれはよりはっきりした形で、知性認識活動はフィクトゥムによって救われるおのおののものすべてを救う、⁽¹⁷⁾ともいわれる。従って、オッカムの論理学、認識の理論等概念に関わる思想体系において、フィクトゥムが如何なる機能を果すものとして位置づけられているか、或いは、フィクトゥムがどれだけのものを救っているのかを見ることから始めるのが順序であろう。

II

我々は先ず『命題集注解』第一巻第二区分第八問題におけるフィクトゥム理論に対するオッカムの関わりから考察を始めたい。上述のごとく第八問題は第四問題から第七問題に至る普遍についての諸説の吟味と反論の後に一応の結着をつけるべき位置にあるが、結論的解答は与えられず、代りに「信ずるに足る」*probabile* と評価されるものを含むいくつかの見解が併記されるに終わっている。「フィクトゥム・心象」*fictum* は、「知性認識活動」*intellectio*、「スペチエス・形象」*species*、知性認識活動から結果する真実の事物としての「事物の似姿」*similitudo rei*、「人為的記号」*signum ex institutione* に続いて第五番目に唯一信ずるに足る理論として紹介される。

その主たる特質としていうところは、普遍は、実在的な事物ではなく魂の中にも魂の外にも実在的な存在を持たないで、ただ魂の中に観念的存在 *esse obiectivum* のみを持つものである。そして、魂の外の事物が実在的存在 *esse subiectivum* において持っているごとき存在を観念的存在において持っている或る種の心象 *fictum* である、というのである。それは、知性が魂の外にある事物を見て、それに類似した事物を精神の中に心象として形成することによって生ずる。それは、もしも知性が心象形成の力を持っているように実物産出の力を持つならば、初めに見た事物と数的にのみ異なる同様の事物を実在的存在において外界に産出するであろうような仕方によってである。そしてまた、丁度建築家が外界に家を見て、自己の魂の中にその家と類似した家の心象を形成し、然る後その類似した家の心象に類似した家を外界に作り出す場合と同様で、作

り出された家は初めの家と数的に異なるのみの同種の家である。その場合、心象として形成された家は範型としてあり、同様に、初めの観察者の場合も、精神の中に心象形成された類似物は、範型として同類のあらゆる外界の個別者に無差別的に *indifferenter* 関わり、且つ、魂の中の観念的存在における類似性のゆえに、魂の外にそれと類似的な実在的存在をもつ諸事物を代示することができる。かかる意味においてそれは普遍である。また、かかる意味において普遍は知性の心象形成によってのみ存在するのであり、これが普通は抽象によって存在するという意味にはかならない。

また、かかる心象 *fictum* は魂の中に存在をもつのであるが、それは単なる観念的存在であって実在的存在をもつのではない。つまり10個の範疇に区分される有ではない。すなわち、アリストテレスによれば、有は第一に魂の中の有（観念的存在をもつもの）と魂の外の有（実在的存在をもつもの）とに区分され、その魂の外の有が10個の範疇に区分される。従って魂の中に在って観念的存在のみを有つものは範疇の区分肢の下には含まれない、然し、魂の中において実在的存在をもつものは範疇の区分肢の下に含まれる。すなわち性質の範疇に属する。知性認識活動や、一般に魂を形相化するすべての属性は、火における熱、壁における白のごとく、⁽¹⁸⁾ 真実の性質である。

概念と同様に、命題とか推論とか、かかる論理学が取扱うものはすべて実在的存在をもつものではなく、観念的存在をもつのみである。従ってそれらが「存在する」*esse* ということは「認識される」*cognosci* ということにかならない。⁽¹⁹⁾ そして、このような形で、例えば、工芸家の精神の中にある制作すべき工芸品の *fictum* は、創造前の神の精神の中の被造物の在り方に均しい、⁽²⁰⁾ というのである。因に同じ考えは『命題集註解』第一卷第三十五区分第五問題にも述べられており、そこでは、「諸々のアイデアは実在的な仕方で神の中にあるのではなく、ただ観念的に、神によって認識されたもの *quaedam cognita* としてのみ神の中にある。というのも、アイデアというものはそれ自身神によって⁽²¹⁾ 産出されるものなのだから」といわれている。ここから概念としての *fictum*

のいま一つの特徴が生ずる。すなわち、魂の概念というものは、一般に、知性認識活動を終らせるもの、終着点となるもの *terminans actum intelligendi* といわれているのであるが、この *fictum* は対象 *obiectum* として、外界に認識さるべき個別者が存しないとき、知性認識の活動を引き受けて終らせるのである。また、個別者が実在的存在においてあるようなそのような仕方では観念的存在においてあることによって、或る意味における個別者の似姿としてその個別者を代示することができる。そして、かく個別者を代示するものとしての *fictum* について真なる事物を名指す述語が真として語られる。すなわち、精神の命題を構成することができる。かくして、「音声が普遍であり類であり種であるごとく、ただしそれは人為的の制定によってに過ぎないが、同様に、このようにして以前に認識された個別的諸事物から心象形成された、すなわち抽象された概念は自己の自然本性によって普遍である」といわれるのである。そしてここで注目すべきことは、オッカムは以上のごとくフィクトゥム論者の主張を彼なりに納得した形で紹介した後、更にこれをアウグスティヌスの権威によって確立強化するという作業を行っていることである。彼はアウグスティヌスの『三位一体論』第八・九・十巻から関連箇所を引用し、結局、アウグスティヌスは *fictum* のことを *imago* とか、*similitudo* とか、*phantasma* とか、*species* とか呼んでいるが、*fictum* が概念または普遍であるというフィクトゥム理論が彼の立場であるというのである。*fictum* そのものの説明としては既述と重なるが、アウグスティヌスの所謂照明説といわれる認識理論が、アリストテレスやトマスのもそれとは大分趣きを異にするが、やはり抽象説の範疇に収まるとされるオッカムの認識理論と如何に調和しうるかという点において興味のある問題でもあるので、以下オッカムのアウグスティヌス解釈を追うことにしたい。

オッカムは、はじめに、知性が魂の中にこれまでに見られたものからそのどれとも同じでない、しかもそのどれとも類似しているといった全体的な類似像を心象として形成することができることをアウグスティヌス『三位一体論』第

八巻第四章によって明らかにする。

「すなわち、我々が見たことはないが、本で読んだり人に聞いたりした或る物體的なものを信ずる時、必然的に精神は自己のために物体の輪郭や形において思考する精神に現われるままに心象形成する。それは真実であらぬかも知れないし、真実であるかも知れない。後者の場合は本当に稀にしか起りえないことであるが⁽²²⁾」

といい、また、

「けだし、使徒パウロが書いているもの、或いは、彼について書かれているものを読む人々や聞く人々のうち、使徒自身の顔やそこに記載されている名前の人々すべての顔を精神に思い浮かべない人が誰かあろうか⁽²³⁾」

と述べ、更に

「主自身の肉の顔は無数の思考が無数に異なっていることによって異なる者として心象形成される。その顔は一つであったのに⁽²⁴⁾」

とある。

ここにおいて、「見たことはないが、本で読んだり人に聞いたりした或る物体」の輪郭や形において思考する精神によって心象形成 *ingere* されたもの、「使徒自身の顔やそこに記載されている名前の人々すべての顔」として精神に思い浮かべる *ingere* であろうもの、「主自身の顔」として心象形成する *ingere* もの、それがまさに *fictum* であり概念にはかならないこと、及び、それは知性がこれまでに見たもの、認識したもの、或いはいま認識しているものではなく、見たことのないもの、更には見ることもないものについての概念であることを指摘する。そして知性はいくつかの見られたものから、これまで見られていない或るものに似たものを心のうちに形成することができると同様に、或る一つの見られたものから全体に似ているものの心象を形成することもできることを確認する。そしてこのようにして前に見られたものから形成された心象 *fictum* によって、前に見られたそのものに似たすべてのものが表示されることになり、結局、このようにして形成された心象について或るものが肯定され

たり否定されたりされることになる、と論を進める。例えば、或る人が個別的な白を見て自己の魂の中にそれに類似的な白を心象形成する、そして彼はその心象の白に別の概念を述語づける。白は色である、とか、白は視覚を分散させるものである、とか。そしてこれはその他の心象 *fictum* についても同様である。そしてこの場合彼が意図しているのは、そのように形成された心象そのものが色であるとか視覚を分散させるものであるとかいうことではなくて、それからしてその心象が形成されることができるようなその各々の白のどれもがそれぞれ色である、または視覚を分散させるものであるということである。だからして彼は、外界にあるすべての白を考察することができないので、その心象をすべての白として使用するのである、ということになる。ここにおいて、かかる心象 *fictum* が概念として語られるものであることは明らかである。⁽²⁵⁾

次いでオッカムは、やはり『三位一体論』第八卷第四章を援用して、我々のもつ心象が各人各様の無統制のものではなく規範的な性格を具えたもので、普遍妥当的な判断の基準たりうるものであることを示そうとする。すなわち、アウグスティヌスは、

「我々が主イエス・キリストについて持つ信仰においては、魂が自らのために心象として形成するところのものは、おそらく事物が実際にあるとは遠く離れた別のものであろうが、それは重要ではない。重要なのは我々がスペチエスに基づいて人間について思考するところのものなのである。というのも、我々はいわば規範という仕方で人間の本性に刻印された知識を持っていて、それに基づいてすべてそのような各々のものを見ると直ちにそれは人間であると認識するのである」

⁽²⁶⁾
と述べている。

問題になるのはここで「いわば規範という仕方で人間の本性に刻印された知識」*quasi regulariter infixata naturae humanae notitia* といわれている知識であるが、そしてそれはここでスペチエス *species* とも呼ばれているが、オッカムはこれを、魂が外界の事物を見て形成するフィクトゥムと別種の、アウグ

スティヌスが同書第十二卷第十五章に述べている「或る種⁽²⁷⁾の非物体的な光において人間の知性的精神の本性が造物主の配置によりそれらを観るようにそれに接属して下に置かれている可知的な諸事物」の知識と解するようなことはしないのである。すなわち、いわゆる照明説には全く言及せず、ただ我々において或る *fictum* が普遍妥当的な機能をもってはたらくことができるという一点のみを強調する。彼はそこでこう結論している。「このことから次のことが明らかになる。別々の人間における姿形や色やその他の諸属性が別々であることによって、我々が形成することのできる心象は各々の人間に似ているものではなく、或いは誰にも似ていないかもしれない。然し我々は、或る心象はすべての人間に対して均しい仕方に関わるものであるという知識を持っていて、その心象に基づいて我々は各々のものについてそれが人間であるかないかを判断することができる⁽²⁸⁾」と。そして少し後のところで、かかる心象は既に知られているところのものから形成される以外にはないというのである。然し暫くは彼の論述を追うことにする。

続いてはオッカムは、『三位一体論』第八卷第六章から引用する。

「私は多くの人達からその（アレクサンドリアの）都市が大きいものであることを聞いてそう信じた時、彼等が私に語る事が可能であったごとく、可能な限りその都市の似姿 *imago* を心に作った（心象形成した *finxi*）⁽²⁹⁾」。

「もしも私がその似姿を私の精神から発出してアレクサンドリアを既に知っている人々の眼前に齎らすことができるならば、彼等は確かに全員がそれは違うというだろう。また、もしその通りだといったら私が大いに驚くだろう。そして私はそれを、すなわちアレクサンドリアの画像としての似姿を心に見ていながらそれをそうとは知らないであろう⁽³⁰⁾」。

ここからオッカムが導出するのは、第一には、このような形での心象形成が可能であること、すなわち、自分が直接知ったのではない知識、他者の知見における不完全な似姿からも或る種の心象がその似姿として形成されるが、しかしそれは、自分が直接知ったものから形成される心象に比して弱い不完全なも

のである，ということ。第二には，用語の問題で，このようにして作られた心象をアウグスティヌスが，*similitudo* とか，*imago* とか，*pictura rei* (事物の画像)，更には *verbum rei* (事物のことば) などと呼んでいること。第三には，このようにして心象形成されたもの，*fictum* は，真に知性によって認識された対象であって，このゆえに，それは命題の構成用語となり得て，それら似姿や類似像がそれであったそのものどものすべてを代示することができるのであり，ということ，すなわち，かかる *fictum* がそれら諸事物に対する普遍であり共通概念であるということである。⁽³¹⁾ 次いで，第九巻に移り，その第六章から以下を引用する。

「そこで我々はその〈永遠の真理の形相〉に基づいてこれら物体的諸事物について判断するのであり，その形相は，我々は理性的精神の直視でもって認知するのである。これら物体的諸事物は，それが現前する場合には肉体の感覚でもって触れ把握するのであり，また，現前しない場合は記憶の中に定着しているそれらのものの似像を想起し，或いは，それらの似姿から我々自身がもし欲し，できるなら(外界に実在的に)構成するでもあろうようなそのようなものを心象として形成する」。⁽³²⁾

これもテキストにおいては，それによって我々が判断するところの永遠の真理の形相と，判断される物体的諸事物の心象との対比を強調している箇所であるが，オッカムは，魂の中に形成される心象 *fictum* は，物体的諸事物が実在的存在においてあるように，そのように観念的存在においてあるものであって，その類似性は，もし知性が外界への諸事物産出の力を持っているならば，最初の実在的存在においてある諸事物と全く類似した数的にのみ異なる諸事物を実在的存在において作りあげるほどのものである，ということのみの理解を示している。⁽³³⁾ そして次の第十巻第二章の引用から，我々の精神の中の諸概念はすべて以前に直知的に認識されたものから心象として形成されるのであること，および，このようにして形成された心象そのものが普遍概念として規範的にも機能することを証示しようとする。すなわち，アウグスティヌスはそこで，

「彼はまた、自分を愛へ駆り立てる想像的形相を心象として形成する。ところで彼は、既に知っていたところのものどもからでなくて、どこからそれを心象として形成するのか。しかも、心のうちに形成され、思惟において最もよく知られたものとしてあるそのものの形相に、もし賞讃されたものの形相が似ていないことを発見したならば、彼はおそらくその形相を愛さないであろう」⁽³⁴⁾

と述べている。これはアウグスティヌスの、いかなる人も知らないものを愛するのではない、という有名な主張の説明の一部であり、この部分は、個々のものとしては知られていないがすでに類的には知っておりそれを個においても知らうと欲して自分を愛へ駆り立てる想像的な形相を心象形成するというのである。そしてオッカムは、ここから一般に心象形成は既に認識されているものからしか形成されないことを確証しようとする。またこのテキストの直ぐ次に、知らないものを愛するといわれるもう一つの場合として、永遠の理性のスペチェスにおいて或るものを見て愛する、という思想が展開されている。オッカムはそのテキストをも含めて、ここにおいて、いま一つ、fictum はそこから心象形成された自分に似ているものどもに対して或る種の共通性をもっているのであって、まさにかかる共通性を普遍と呼ぶのがこのフィクトゥム理論であると指摘する。⁽³⁵⁾

これに対して更に、精神は霊的なもの、単純実体についても心象形成が可能であるかという問が出される。すなわち、複合的諸物体の場合はその諸部分が知性によって様々な仕方では結合されるけれども、そのような部分を持たない霊的諸実体や単純諸実体についてはこうしたことは不可能であり、心象形成も不可能ではないかというのである。これに対しては第十卷第三章が引用される。すなわち、

「(精神は) おそらく自己自身を愛するのでなく、自己について心象形成しておそらく自己自身とは遙かに異なった別のものであるそれを愛するのである。或いは精神は自己に似たものを心象形成するのもかも知れない。その場合

は、精神はその心象を愛する時、自己を知る前に自己を愛するのである。なぜなら、精神は自己に似たものであるその心象を直視するのだから。その時精神はまた、それらから自己の心象形成をしたであろうところの他の諸精神を知っていたのであり、精神は自己の類でもって自己に知られていたのである」⁽³⁶⁾

というのであり、オッカムはここから、単純なものである魂についてもやはり同様な *fictum* が持たれうること、及び、その *fictum* は認識されたものすなわち観念的存在であり、類であり、共通概念であることが証示されたとする。⁽³⁷⁾

以上によって、フィクトゥム理論はアウグスティヌスが *imago* とか、*similitudo* とか、*phantasma* とか、*species* とか呼んでいるものを *fictum* と呼んでいるに他ならず、それが魂の概念を意味するものなることが明らかになったというのである。そしてオッカムは更にアウグスティヌスの *fictum* 観を敷衍して、*fictum* は、「可感的諸事物が現前しない場合に直接に傾向づける修得態によって、その可感的なものが知性認識されることへと向うべく、記憶の中に存続している。そして、そういうことで知性がそれら不在の可感的なものをその遺された *fictum* を媒介にして自己に適合する存在にすることができるほどにまで接近した可能態においてあるものとしてそこに在るのである。修得態が媒介になるのでは、然るに、そのように魂の外の物体を自己に適合する存在にすることはできないのである、なぜなら、自己に適合する存在が実在的存在になるのだから」とアウグスティヌスによっていわれている、と付言している。

ここにまた一つのオッカムのアウグスティヌス解釈が窺われる。アウグスティヌスは修得態 *habitus* などというアリストテレスの用語は用いていないのだから。そしてまた、オッカムにおいては記憶というアウグスティヌスの認識理論の中心概念はなじまないのである。そしてこの付言の意味は、あくまで *fictum* は観念的存在、認識された存在であって、それに対して、修得態は魂を基体として実在的存在においてあるものである。従って *fictum* は自然的記号として精神命題を構成し外界の可感的事物を代示することができるのである。

そのようなものとして記憶の中に遺されている。アリストテレスやトマスにおいては修得態そのものがまさに修得された知識であって、概念や命題の場であるのだが、そして、オッカムも直知認識 *cognitio intuitiva* から抽象認識 *cognitio abstractiva* へ移行し概念形成が成立する場面では、修得態をそのように考えているようにも解されるが、ここではやはりアウグスティヌスとトマスとを分離して、というのは記憶と修得態とを役割分担して、記憶には概念の保存を修得態には知性認識或いは思考への傾向性を当てたものと考えられる。

第二区分第八問題のフィクトゥム理論についての叙述は、アウグスティヌスの権威による補強の後、更に若干の問題提起とそれに対する解答が提示されて終っている。G.レフも述べているごとく、これはオッカムの全著作を通じて最も完全なフィクトゥム理論の記述であり、この第八問題において先行して述べられている四つの理論との関係において見る時、彼が最初、⁽³⁸⁾ といつかこの当時このフィクトゥム理論を他のすべての可能な理論の中で最も好意を寄せ信頼していたことは疑いのないところと思われる。ただ上に述べたごとく、第八問題の最後のところでは決定を他に委ねていること、この理論を「信ずるに足る」*probabile* とより以上には呼ばなかったことは留意すべきであろう。

III

『命題集註解』第一巻第二区分第八問題における概念の本性としてのフィクトゥム理論の展開を見た後には、我々は、やはり前期の、しかも『命題集註解』第一巻（オルディナチオ）と同時期の作と見做されているアリストテレス論理学註解書のうちの『命題論註解』の序章におけるフィクトゥム理論について考察しなくてはならない。然し、結論への収束が緊急事となった今、そして、内容的に最も完全といわれる記述を検討し了った今、理論そのものよりはむしろ理論に対する批判に眼を転じたいと思う。上述の第二区分第八問題にはそれは殆ど見られなかったのであるが、『命題集註解』序章にはそれが窺われる。そしてそれは後にフィクトゥム理論が斥けられてインテレクチオ理論に変移する

一つの変換点を示すものと思われるものでもある。然しその前になお両書の相違について指摘しておきたい問題点がある。それはインテレクトオ理論の取扱いに関わるものである。

前著『命題集註解』第一巻第二区分第八問題におけるインテレクトオ理論は、むしろ、否定的記述において特徴的といつてよい程のものであり、特にその第二の反論は決定的と思われる。すなわち、精神の概念とは、すべての人々によって知性認識の活動を終らせるところのものであるといわれている。然るに、intellectio とは知性認識活動そのものの謂であり、従って、それが概念であるとするとは知性認識活動自己自体が自己自体を終らせるものでなくてはならない。然るに、活動自体が直接に活動自体を終らせることは考えられない。それゆえ知性認識活動が概念であるのではない、というのである。⁽³⁹⁾これに対して、『命題論註解』序章においては、知性認識の活動 actus intelligendi そのものが魂の概念であるという見解は、概念を魂を基体としてその中に真なる性質として実在的に存在するものとするいくつかの見解のうちでより多く確からしいprobabilius と評価されて、フィクトゥム理論の独壇場の感のあった第八問題と異なり、まさに伯仲する理論として両者が展開されている、ということである。

さて、フィクトゥム理論に戻って、オッカムはここで反論というよりは、むしろ、フィクトゥム理論に対する不安を表明しているという感を持つのである。それは専ら fictum の観念性ということに関わっている。すなわち、実在的な或るものが、実在的な魂の能力としての知性による実在的な知性認識活動でもって知性認識されることができて、しかも、その認識された或るものそれ自体も、その部分も、それと関わる如何なるものも自然の中に存在しえないというそのような或るもの、すなわち、fictum とは一体どんなものであろうか、というのである。⁽⁴⁰⁾観念的存在であるがゆえにこそ認識された有として魂の観念でありえた fictum の観念性が咎められることになってはまさに変革である。

この後、オッカムの実在性指向は更に強まり、『自然学問題集』になると、⁽⁴¹⁾事物の似姿のすべてが事物の概念とはいわれえないのであって、およそ概念と

いわれるほどのものは現実的思考が実在している時にのみ存在しうるものである、と宣言されるにいたる。そしてこれにいわゆる思惟経済の原理というオッカムの剃刀が加わるのである。『大論理学』第一卷第十二章は、インテレクチオ論者の他に優る論拠として、「より少数のものによってなされうることをより多数のものによってなすのは無益のこと」というテーゼを掲げて、知性認識の活動そのもの以外に概念たるものを立てるのは無用であり、つまり概念とは知性認識の活動そのものである、というインテレクチオ理論を優位に上げてい⁽⁴²⁾る。

他方、はじめにインテレクチオ理論が批判されたところの「知性認識の活動を終らせる」という概念の特質については、概念とは知性認識の活動を終らせるものであるとすべての人々によっていわれている、と大前提として立てられたのであるが、これもその前提自身が誤りであるとあっさり処理されてしま⁽⁴³⁾うのである。

ところで問題はここにおいて再び新しくなる。概念、特に普遍概念の本性についての問題は初めにも触れたごとくオッカムの理論的哲学の殆どすべてに関わるものであり、特に認識の理論においてはその根底をなすものといってよい。然るにそれは殆どが『命題集註解』において展開されているといつてよく、しかも上述のごとく、『命題集註解』の諸論述はフィクトゥム理論を前提にして立てられていると解される。そのすべてがインテレクチオ理論によって救われるか否かは、オッカムの保証はあっても、吟味されるべき問題である。また概念は、オッカムが一貫して常に主張するごとく、精神語として精神命題を構成し、また、上述のごとく、命題、推論のすべてを含んで、人為的記号たることばと文字とに対応する自然本性的記号であった。その時、概念は現実的思考が実在する時にのみ存在する、といいうるのであろうか。つまり、例えば、命題の知性認識の場合、最低、二つ乃至三つの概念の知性内同時存在が必要であり、更に、スコトゥスと同様に、命題の構成作用と構成された命題の認識作用とを区別することになれば、インテレクチオ理論の場合、多数の現実的知性活

動が同時に知性内に存在することが必要となり、事実、オッカムは載然とそれを認めるのである。ここにおいて、それが真に思惟経済になるのであろうかという疑念は消しえないものがあるように思われる。フィクトゥムからインテレクトオへの変換の理由と共に、オッカムの思想体系そのものの内在的問題として更に検討を要すると思われる。稿を改めて問うことにしたい。

註

- (1) Ockham, *Scriptum in I Sent.*, d. 2, qq. 4-8, *Opera Theologica II*, pp. 99-292, St. Bonaventure, N. Y. 1970. (爾後全集は *Opera Theologica* を *OTh*, *Opera Philosophica* を *Oph* と略記)
- (2) オッカムの『命題集註解』第一巻第二区分第八問題のテキストの構成については複雑な問題が孕まれているが、その解釈については、大筋において Ph. Boehner, *Collected Articles on Ockham* 所収の *The Realistic Conceptualism of William Ockham* (pp. 156-174, 特に第三節 p. 168 以下) 中の解釈に従った。G. Leff も *William of Ockham, The Metamorphosis of Scholastic Discourse*, Manchester Univ. Press 1975 において (特に第一部第二章第一節, pp. 78-103), Boehner の解釈を可しとしてこれに従っている。
- (3) *Ibid.*, q. 8, *OTh II*, pp. 291 lin. 16-292 lin. 2.
- (4) Ockham, *Expositio in librum Perihermeneias Aristotelis*, Lib. I, prooemium, *Oph II*, pp. 345-376. 勿論、『序章 概念の本性についての諸見解』prooemium: *opinionones de natura conceptus* というのは全集編者の付した名前であるが、オッカムが『命題論註解』の冒頭において「魂のパトス」*passio animae* の検討に与えた論述の量と質は充分「序章」というに相応しい。
- (5) アリストテレス『命題論』第一章, 16 a 2-4.
- (6) Ockham, *Expositio in Perihermeneias Arist.*, prooem., § 3. *Oph II*, pp. 348-349.
- (7) *Ibid.*, §4, p. 349.
- (8) *Ibid.*, §7, p. 359.
- (9) オッカムには書き下しの論理学の著作が三つある。*Oph* の第一巻を成している *Summa Logicae* と、Elegius M. Buytaert によって “*Franciscan Studies*” vol. 25, 26. 1965, 1966 に掲載された *Elementarium Logicae* と、同じく同人によって同誌 vol. 24, 1964 に掲載された *Tractatus Minor* である。Ph. Boehner は ‘*Three Sums of Logic attributed to William Ockham*’ (1951), (前出 *Collected Articles* に所収) の中でこの三論理学書を、夫々 *Tractatus Logicae Maior*, *Trac-*

tatus Logicae Medius, Tractatus Logicae Minor と呼んでいる。ここから『大論理学』と呼んで置く。

- (10) *Summa Logicae*, I, c. 12, *Oph* I, p. 41, lin. 8-9.
- (11) *Ibid.*, p. 41, lin. 16-42, lin. 28.
- (12) G. Leff, *op. cit.*, p. 78.
- (13) *Summa Logicae*, I, c. 12, *Oph* I, p. 43, lin. 40-43. オッカムはここで「後に詳説 perscrutari する」といっているが、そしてこのテキストの編者は c. 14, 15, 40 をそれに当てているが、いずれも詳説といわれる程の記述は見られない。
- (14) Ph. Boehner の前出論文 ‘Realistic Conceptualism’ 参照。及び, G. Leff の前出書 *William of Ockham*, pp. 100 ff.
- (15) Boehner は上掲論文の最後 (*Collected Articles*, p. 174) で、「一点だけは絶対的に確実である。オッカムは最後的にはインテレクトオ理論のみを信じた」と断言している。然し, Leff は、後期にオッカムがいうところの概念としてではないが、認識活動全体を考えた場合、フィクトゥム残存の必然性を認めている (*op. cit.*, pp. 100-103)。
- (16) *Summa Logicae*, I, c. 12, *Oph* I, p. 43, lin. 35-39.
- (17) *Quodlibeta Septem*, q. 35, *OTh* X, p. 474, lin. 115-120.
- (18) *Scriptum in I Sent.*, d. 2, q. 8, *OTh* II, pp. 271, lin. 14-273, lin. 14.
- (19) *Ibid.* p. 273, lin. 19-22. なお *fictum* の *esse* は *cognosci* であるという記述は、『命題論註解』序章第七節, *Oph* II, p. 359, lin. 10-11 にも見られる。またここから、観念的存在は *esse obiectivum* の他に, *esse cognitum* ともいわれ, また, *esse intentionale* も見られる。
- (20) *Ibid.*, p. 274, lin. 1-2.
- (21) *OTh* IV, p. 493, lin. 5-8.
- (22) Augustinus, *De trinitate*, VIII, c. 4, n. 7 (*PL* 42, 951).
- (23) *Ibid.*
- (24) *Ibid.*
- (25) Ockham, *OTh* II, pp. 276, lin. 8-277, lin. 22.
- (26) Augustinus, *De trinitate.*, VIII, c. 4, n. 7 (*PL* 42, 951-952).
- (27) *Ibid.*, XII, c. 15, n. 24 (*PL* 42, 1011).
- (28) Ockham, *OTh* II, p. 278, lin. 7-12.
- (29) Augustinus, *De trinitate*, VIII, c. 6, n. 9 (*PL* 42, 955).
- (30) *Ibid.*
- (31) Ockham, *OTh* II, p. 279, lin. 3-11.
- (32) Augustinus, *De trinitate*, IX, c. 6, n. 11 (*PL* 42, 967).

- (33) Ockham, *OTh* II, p. 279, lin. 20-23.
- (34) Augustinus, *De trinitate*, X, c. 2, n. 4 (*PL* 42, 974).
- (35) Ockham, *OTh* II, p. 280, lin. 8-15.
- (36) Augustinus, *De trinitate*, X, c. 3, n. 5 (*PL* 42, 975).
- (37) Ockham, *OTh* II, p. 281, lin. 7-9. この箇所の読みにはなお問題があるが一応こ
う読んでおきたい。
- (38) G. Leff, *op. cit.*, p. 98.
- (39) Ockham, *OTh* II, p. 268, lin. 14-19.
- (40) Ockham, *Expositio in librum Perihermeneias Aristotelis*, Lib. I prooemium,
Oph II, p. 360, lin. 30-34.
- (41) Ockham, *Quaestiones in libros Physicorum Aristotelis*, q. 4, *Oph* VI, p. 404,
lin. 3-7.
- (42) Ockham, *Summa Logicae*, I, c. 12, *Oph* I, pp. 42, lin. 30-43, lin. 39.
- (43) Ockham, *Quaest. in lib. Phys.*, q. 5, *Oph* VI, p. 406, lin. 20-23.